地域とともに歩む本校の教育活動

― 旭川市教育支援センター「ゆっくらす」への協力 ―

現在、全国で不登校の小中学生は３４万６，０００人を超えると推定されており、これは旭川市の人口を大きく上回る数に相当します。子どもたち一人ひとりが、何かに興味や関心を持ち、少しでも意欲的に日々を過ごせるようにすることが、教育に携わる私たちの大切な使命であると感じています。

旭川市教育支援センター「ゆっくらす」は、不登校となった小学校高学年から中学生を対象に、学習を支援する教育施設です。名称には「ゆっくりと自分のペースで学ぼう」という思いが込められており、旭川市教育委員会が運営しています。常勤教員・非常勤職員に加え、大学生や地域のボランティアの協力により、一人ひとりに合わせた学びの場を提供しています。

一方で、理科実験や職業体験などの「特別な学び」に触れる機会は限られているため、地域の教育機関や専門家がボランティアとして授業を行う取り組みも行われています。本校もその一翼を担い、毎年「ゆっくらす」からの依頼を受け、理学療法学科・作業療法学科・看護学科の教員が、実技を取り入れた医療職体験授業を提供しています（図１）。

図１．自助具（特殊な箸）による作業療法の体験をしているイメージ像

これまでの活動を通じて、「ゆっくらす」での学びをきっかけに、再び学校生活に戻ったり、新たな興味を見出して進学を目指す中学生がいることを伺っています。そのような話を聞くたびに、本校の出前講座が微力ながら地域の教育活動に貢献できていることを実感しています。

子どもたちが理数科目への苦手意識を抱いたり、いじめなどの理由で学校に通えなくなったりするのは、多感な小学校高学年から中学生の時期に特に起こりやすいといわれます。さらに「ゆっくらす」に登録している生徒の中には、事情により毎日通うことが難しいケースも少なくなく、対面教育だけでは支援しきれない課題も浮かび上がっています。

本校では、コロナ禍を契機に導入されたオンライン授業（ＺＯＯＭなど）や、ＩＣＴ技術（メタライフ等）を活用した学びの可能性について、教職員間で話し合っています。こうした仕組みは、通学が難しい生徒に学びの機会を保障する一つの解決策となるかもしれません。人口減少が進む我が国において、教育の在り方は大きな転換期を迎えています。本校としても、地域社会に貢献しながら、本校の教育活動においても質の高い教育を保障する新しい方法を常に模索し続けてまいります。

今後とも、保護者の皆さまには、本校の教育活動にご理解とご協力をいただきながら、地域と共に歩む取り組みを温かく見守っていただければ幸いです。

（文責　林要喜知）